

みのり

<製作：平成8年度博物館実習生20名>

博物館1階の寄贈品コーナーに注目してください。いつもとは一風変わった賑やかな展示ができあがりました。居酒屋風の題字“みのり”に続いてかわいい案山子（かかし）が迎えてくれます。かつてのドブっ田での稲刈りを物語る田舟、刈台に続き、おっと透明人間が稲コキをしているではありませんか。センバ（稲コキマンガ）の隣にはイチッコを担いだベニヤの人形がポリエステルズボンにランニングシャツという時代考証を無視したいでたちで立ちはだかっています。これには平博（たいらひろし）という名前がちゃんとついているのですが、小学生からは宇宙人と呼ばれていました。

稲はセンバの刃の間にはさんで籾をコキ落とします。センバの威力は抜群で、籾はすべて下に落ちるのですがなかには穂首から切れた籾も混じります。これをクルリで叩いて籾を落とします。トゾルドオシ、箕、唐箕と選別の手順を分かりやすく展示しています。

床面に稲や藁が散乱したコーナーが続きましたが、格調高いお月見の展示に始まり、秋の年中行事がしめくります。美味そうな十五夜の供え物、餅を背負って歩く蛙を大根が首を伸ばして見るという田の神節供のイラストなどが見どころです。

これらの展示は各大学から来た実習生20人が作り上げました。実習生は9月11日から19日まで一週間博物館の仕事を体験し、前半は各部門に分かれて資料整理作業を行い、後半の3日間で展示を作りました。展示について民俗担当のH2学芸員は「自分がやった展示より嬉しい」と出来映えに満足しているようです。若い感性と創意工夫が溢れた展示をぜひご堪能あれ。

実習生は期間中毎日実習日誌を提出することが義務づけられています。まじめにきちんと書けている日誌が多いなか、背伸びせず型破りの日誌を書いたI君のが学芸内で話題になりました。9月18日分を抜粋して紹介させていただきます。

◎（前略）ラベルはパソコンでつくることとなったが、パソコンに詳しい人が行うしかないので、口はあまりはさめない。個人的に文字を扱うにはパソコンは不向きだと思っている。ラベルや解説、写真と平行して展示準備もすすむ。道具の使い方を人形を使って説明するため、ベニヤで人型をつくる。マネキンがベターがないので、人から型をとりつくる。これに服を着せ、それらしくみせる。しかし、それらしい服がみつからなかった。収蔵室から出てきたスポンはなぜ資料なのか不思議な一品。実際に人型にはかせ浜野さんに見せたところ、浜野さんの作業スポンであったことが判明した。このペースで進めば出来ます。

彼が幸か不幸か今回の展示の象徴「平博君」を誕生させてしまった張本人のひとりです。



続いて、公開されることを前提にして書いてもらった感想文を紹介します。

◆私達の7日間の実習は初日のビジターズガイドの制作から始まり、各分野ごとの資料整理、館の野外行事でもある『漂着物を拾う会』への参加（雨の為一般の方とは同行できなかった）、そして寄贈品コーナーへの展示を行った。中でも寄贈品コーナーへの展示は内容についての実習生同志での話し合いから白熱戦が繰り広げられたが、その結果がどうなったかは実際に展示を見て下さい。宙に浮く軍手や巨大色白農民、リアルなお供え物など完成した展示に実習生は満足して実習を終了したが、実習延長組の私達はこの展示が博物館の資料展示としていかに妙な物であるかを学芸員の先生方からお聞きしてその場で手直ししてしまいたい衝動にかられた。しかしこれがあの時点での私達の最高傑作と思ひ踏みとどまった。このように他では決してできない体験と、学芸員の先生方にはとんでもない気苦労を残して私達の実習は終わった。私達の実習を支えて下さった皆さん本当にありがとうございました。

（宮崎 麻子）

★のんびりとした学生生活を送っていた私にとっては、疲れることもありましたが充実した実習期間となりました。見学で訪れるときには考えられない長い時間を博物館の内側で過ごせたことは、大変貴重な経験だったと思います。

実習を通して再確認することができた事を1つ書きます。それは、知る喜びは身近なものに改めて目を向け直すことだけで十分に味わえるということです。知識や学問というものは、何かに気づいて疑問を抱くことから生まれる、などと言われます。地域に根ざしたこの館は、身の回りにそのようなきっかけがたくさんあることを伝えようとしているように感じました。また、普及活動への参加を通して参加者の方々の熱心な姿にも触れることができ、自分なりに興味関心を持っていることの楽しさを思い出したような気がします。

（富田 雅史）